

人権と国家

―理念の力と国際政治の現実

スタンフォード大学社会学部教授
筒井清輝

- *新しい普遍的人権
- *拷問・奴隷貿易撤廃が始まり
- *メデアが果たした役割
- *国際人権団体の活躍
- *東西で異なる人権
- *国際人権への期待と失望
- *国際人権の存在意義
- *日本の果たすべき役割
- *理念と組織の両面
- *言い訳できない難民政策



柴生田 それでは開会いたします。（拍手）

本日は、昨年石橋湛山賞を受賞されました筒井先生においでいただきました。

数週間前にもう一方の受賞者の講演をしていただきましたけれども、きょうは先生に『人権と国家』という岩波新書の本の内容を少しブラッシュアップしてお話しいただけるということでございます。

1971年のお生まれで、京都大学をご卒業後、スタンフォード大学でPh.D.を取得され、2020年からスタンフォードに戻って教授をされております。

ウクライナ戦争、その他世界中で少し民主主義が後退して人権がおろそかになったりするケースが増えているわけですが、その人

権も国家から離れ市民の方からどういう展開があるのか、そういったようなことを先生は長年ご研究されてこられたわけで、今後の展望を含めて今日はお話しいただけると思います。

それでは先生、よろしくお願いいたします。（拍手）

新しい普遍的人権

筒井 11月にこの同じステージで石橋湛山賞の授賞式にお邪魔させていただきました。『人権と国家』という本を書きまして、いちばん最初に賞をいただいたのが石橋湛山賞で、その後、いろいろなところでもほかの賞もいただきましたけれども、そのときの喜びを今また再びかみしめている感じがです。石橋湛山記念財団の皆様、